



# 白小だより

令和5年5月31日

6月号

府中市立白糸台小学校

校長 堀越 新一

## 体験から学ぶ

校長 堀越 新一

今ほど温暖化とはいわれていないころにも暑い1学期はあり、当時教室にエアコンはなく、休み時間、思い切り外で遊んできた6年生40名近くがいる教室の熱気は今以上でした。下敷きをうちわにする間違った使い方を容認しつつ、暑さに耐えながら子供たちを授業に向かわせようと熱くなる担任であった私は、夏休み休暇の目標の一つを「清流に足を浸して文庫本を読む」としました。ちょうど北陸の知人を訪ねる約束もあり、北アルプスから流れてくる清涼感あふれるせせらぎをイメージして暑さをしのいだこともありました。

当日、降り立った駅で車をレンタルし、カーナビもないころ、地図で清流の見当をつけ、しばらく走ってここという場所を見付けました。河原に下り、岩に座って文庫本のページを開き、清流に足を浸しました。

1ページも進みません。あまりに冷たく、痛いくらいだったからです。ここまで来たのだ、そのうち慣れる、と浸し続けましたが苦行でしかありません。耐えられず足を引き上げ、目標を「温泉」に切り替えました。

頭の中のイメージや予想とは違う、体験したり確かめたりしなければ分からないことがあります。今は端末に条件を入れるだけで分かることも多くなりました。しかし、「驚き」「感動」「実感」はどうでしょうか。

校外での学習も始まり、2年生は多摩動物園に遠足に行きました。公共交通機関である電車に乗るとすぐにリュックサックを体の前に抱え直しました。ついこみ上げてしまう笑いを必死にこらえる子もいました。車内で他の方に迷惑をかけないように考えてのことです。4年生は「水再生センター」に見学に行きました。私たちが使った水をきれいにして川に返すための施設です。下水が集まるためきつい臭いがする所もあり、鼻を押さえ顔をしかめる子がたくさんいました。働いている方に「あのおいのした所には、どのくらい(の頻度で)行くのですか」と質問する子がいました。体験したからこそ聞いてみたくなった質問です。「1年中1日も休まず必ず誰かが行って点検しています。みなさんの家では毎日下水を使っていますね。この日は水を流さないでくださいってお願いしても無理ですよね。」との答えにうなずいていました。

端末や書物で知識を得ることはできます。しかし驚きや実感を伴って得た知識は、ただ「知った」「覚えた」とは違うものになっているはずです。東京グローバルゲートウェイ(TGG)で、英語を日常語とする方たちと英語だけで意思疎通を図り、一つのプロジェクトをやり遂げた5年生は6月、3泊4日の「わくわく自然教室」に行っておりま。6年生の社会科見学、全児童参加の白小子どもまつりなどの行事も、子供たちにとって意義ある学びとなるよう計画いたします。そして日々の学習でもタブレット端末を有効な場面で積極的に活用しながら、実際に見て触れて感じる体験も大切にしていま。

「暑い夏でも、川の水は場所によっては長く足をつけていられないほど冷たい」これは生活に必要な知識ではないかもしれませんが、その後学級の子供たちに接する際、「子供にとってよいこと、よい計画だと思ひ込みで決めつけていないか。独りよがりになっていないか」など実践の前に振り返る必要があると考えるようになりました。この自分で自分を笑ってしまうような体験(失敗)から得たものの一つです。